

学生の英語との関わりについての予備調査

——自律学習者育成に向けて——

久保田 絢

1. 調査目的

本調査の目的は、より学生の現実に即した英語指導を行うために、本学学生の日常生活における英語との関わりを明らかにし、自律学習者育成の方法を探ることである。調査の対象となる学生の多くは、英語が母語として話されている地域に在住した経験が乏しく、家庭でも英語の使用が日常的でない、いわゆる EFL (English as a foreign language) 環境の学習者である。

具体的には、2つの点に着目し、分析・考察を行う。1つは、EFL 環境の学生が英語に対してどれだけ親近性（機会、好感性、必要性）を見出しているかである。親近性とは、対象に対する馴染みの度合いであり、その対象と接する機会がどれだけあるか（機会）、どれだけその対象を必要であると感じているか（必要性）、また、どれだけ好感を持っているか（好感性）などが含まれる。

2つめは、EFL 環境で自律学習者を育成する方法を探ることである。EFL 環境では自律学習者になることが学習成功への必須条件であり、自律的学習者になれば、学習が成功する可能性が高いとこれまでの研究で明らかにされている（青柳・小西・久保田他、2008；竹内、2003）。ここでは自律学習者を、青柳・小西・久保田他（2008）の定義に従い、「他から強制されるのではなく、自らの意思で英語を学習する学習者であり、自分の英語力を分析し、自分の英語力を向上させるために必要な学習方略を持ち、具体的な学習計画を立て、継続的に学習を行うことができる学習者」とする（pp. 82-83）。筆者は自律学習者になるためには、英語に対する親近性を高める必要があると考える。本研究では、学生の英語に対する親近性を高め、学生が自律学習者になるための指導のあり方を検討する。

2. 調査方法

今回の調査ではアンケート調査とインタビュー調査の2種類の方法を用いた。アンケート調査は、全体像を把握するために行い、アンケートの調査項目について、インタビュー調査でさらに詳細な聞き取りを行った。調査期間は2014年9月末から10月末までの約1ヶ月、筆者が担当した英語科目（Basic English 1、Basic English 2、English 1、English 2、English 3、English 5、TOEIC Training Id）の受講生にアンケート調査への協力を依頼し、107名から回答とデータ利用の承諾を得た。本学では新入生全員を対象に入学時にTOEICを実施し、英語共

通科目については TOEIC のスコアによって履修できるクラスがある程度決められている。上記の科目はすべて英語共通科目である。調査協力者の学部の内訳は交流文化学部 53 名、ビジネス学部 27 名、メディアプロデュース学部 13 名、健康医療学部 2 名、心理学部 6 名、人間情報学部 3 名、文学部 3 名である。また、学年の内訳は、1 年生が 81 名、2 年生が 14 名、3 年生が 10 名、4 年生が 2 名である。アンケート調査の際、インタビュー調査への協力に同意する人には、名前を書いてもらうよう依頼した。同意を得た回答者のうち 7 名（ビジネス学部 3 名、交流文化学部 4 名）には、30 分から 1 時間のインタビューを行った。

本調査は筆者の担当する授業内の調査であり、学年や英語のレベル、学部によらつきがあること、また、データ量が不十分であることから、学年ごとの差や、学部間の違いなどの分析は行わず、回答者全体の大まかな傾向を捉えることを目的とした。今回の調査は、今後詳しく調査すべき項目を検討するための予備調査という位置づけである。

調査項目の内容については主に、小林・齋藤他（2013）「薬学部 2～4 年生の海外留学と英語に関する意識調査」の調査項目を参考にした。また、質問の仕方については、和田・中田（2010）が開発したファシリテーションの手法を活用した。この手法は、考えを尋ねるための質問と事実を尋ねるための質問（事実質問）をはっきり区別し、事実質問によって、簡単な事実を積み重ねながら実態を浮かび上がらせていくものである。通常、スミス山下（2012）「薬学系大学生の英語学習に対する意識：学部生を対象とするアンケート調査から」における調査項目に見られるように、英語（または英語学習）に関する意識調査では、「英語が好きですか。」「あなたにとって英語の学習が必要だと思いますか。それはなぜですか。」「どうして英語を勉強したいですか。」など直接、感情や考えを聞く質問の仕方が一般的である。しかし、本調査では、好みを聞く質問や意見を聞く質問を排除し、事実質問に徹した。和田・中田（2010）によると、すべての質問は以下 3 つのタイプに分類される。

1. 好み = 感覚、感情

例：「英語が好きですか」

2. 思い込み、考え、意見

例：「あなたにとって英語の学習が必要だと思いますか。それはなぜですか。」

3. 事実

例：「海外に行ったことはありますか。」

1、2 は、相手に考える余地を与える質問である。そのため、例えば、聞き手が求めているであろう回答をする、あるいは、自分にとって都合のよい回答をするなど相手が答えを意識的に、あるいは無意識に歪めてしまう場合があると和田・中田（2010）は指摘する。本調査では「なぜですか?」「～はどうですか?」といった考えを聞く質問を避け、「いつ」「どこ」「何」「誰」といった単純な疑問詞を使った質問や「～したことがありますか?」「～を知っていますか?」など何かの有無や存在を尋ねる質問を重ねることで、時と場の特定できる事実を積み上げ、その事実関係から実情はどうであるか、また、相手がどのような考えを持っているかを明らかにすることを試みた。

アンケート調査の質問項目は以下の通りである。

Q1. 海外滞在期間：海外に行ったこと、住んだことがありますか。

Q2. Q1 で Yes と答えた方にお聞きします。海外はいつ、どこに、どれくらいの期間、行きましたか。

（複数回ある人は合計何回行った経験があるかと自分に一番影響を与えたと思われる海外滞在について、いつ、どこに、どれくらいの期間行ったかを書いてください。）

Q3. 英語ができてよかった、もしくはできたらよかったのと思った経験はありますか。

Q4. Q3 で Yes と答えた人にお聞きします。それはいつ、どのような状況でそう思いましたか。

Q5. Q4 で Yes と答えた方にお聞きします。その経験の後、英語の学習に関して何らかの変化は見られましたか。

Q6. Q5 で Yes と答えた方にお聞きします。具体的にどのような変化が見られましたか。

Q7. 最近、授業以外で英語に触れたのはいつどのような場面においてですか。

Q8. あなたの身近な人で英語を必要とする仕事に就いている人はいますか。（英語担当教員以外で）

Q9. Q8 で Yes と答えた方にお聞きします。それはどのような関係の方ですか。

（複数いる方は該当する項目すべてに○をつけてください。）

（両親・兄弟・親戚・友人・その他）

Q10. 英語はこれから重要だからしっかり勉強した方がよいというようなことを言われたことがありますか。 (Yes・No)

Q11. Yes と答えた方にお聞きします。誰からいつ言われましたか。（複数回答あり）

（両親、兄弟、親戚・友人・教員・その他）

（小学校・中学校・高校・大学）

インタビュー調査は、アンケート調査の Q3 「英語ができてよかった、もしくはできたらよかったのと思った経験はありますか」の質問に対し、日本国内で英語の必要性を意識した経験を書いた学生を対象として行った。アンケート調査の結果、英語学習に変化の見られた経験で一番多かったのは、海外での経験であったが、海外経験ではなく日本における経験を書いた学生を対象にインタビューを行った理由としては、日本にしながら、英語に対する親近性を高めるための方法を探ることを目的としているためである。

インタビュー調査においては、事前に大まかな質問項目を決めておき、回答者の答えによってさらに詳細にたずねていく半構造化インタビューの方法を用いた。質問の内容、順番、表現なども回答者の答えに応じて変化させた。大まかな質問項目は、生活習慣、大学でこれまで履修した英語科目と授業外での英語学習、英語に触れる機会（学内、学外）、周りからのアドバイスである。インタビューはすべて録音し、必要な箇所を書き起こした。

今回の調査目的の1つである英語に対する好感性については、和田・中田（2010）のファシリテーション技法に基づき、好感性について直接聞く質問（「英語は好きですか。」）はアンケー

ト調査の質問項目から排除し、インタビュー調査結果から分析することにした。具体的には、英語に関係するこれまでの経験を把握し、調査協力者の英語に対する態度を分析する。また、調査協力者が事実に関する質問に答える中で発した好感性に関連する語を抽出して分析するなどの方法を採用した。

3. アンケート調査結果

Q1・2 海外経験

海外に行ったことがない人が65%と、行ったことがある人(39%)を大きく上回った。

行き先は、アメリカ(ハワイ、グアムを含む)が47名中17名と最も多く、続いてオーストラリア8名、韓国4名と続いた。その他、カナダ2名、シンガポール2名、フィリピン2名、ベトナム2名、タイ2名、マレーシア2名、台湾2名、フランス2名、イタリア2名、イギリス1名、ニュージーランド1名、であった。

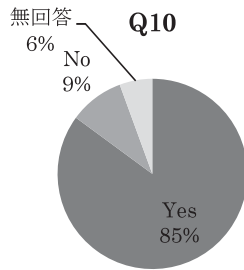
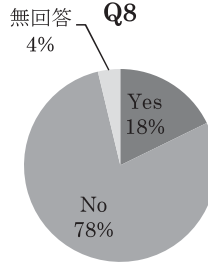
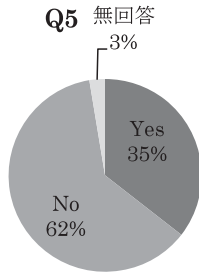
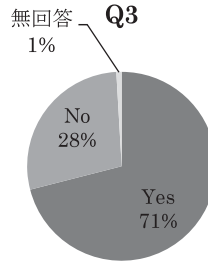
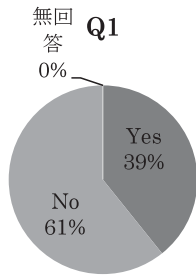
Q3・4 英語ができてよかった、もしくはできたらよかったのと思った経験

英語の必要性を感じたことのある学生の割合は71%であり、いつ、どのような状況でそのように感じたかについては、以下のQ4の表に見られるように、海外に行ったときに必要性を感じたと回答した人が最も多かった。続いて、道を尋ねられたとき、アルバイトの際と回答した者が多かった。いつそのような経験をしたか、という質問については無回答が多かったため、本調査では明らかにすることができなかった。

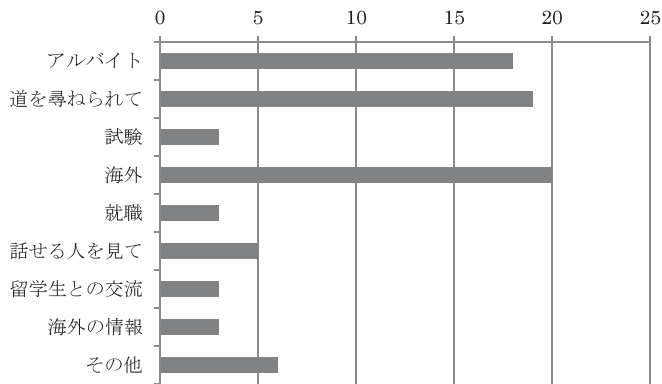
英語ができてよかった、もしくはできたらよかったのと思った経験の具体的な状況(いつ、どこで)については、何かを尋ねられたときに、うまく答えられなかった、聞き取ることができなかったなど、会話において必要性を感じたと回答した人が80%に上った(76名中61名)。

Q5・6 英語ができてよかった、もしくはできたらよかったのと思った経験後の、英語学習の変化

英語ができてよかった、もしくはできたらよかったのと思った経験の後、英語の学習に変化が見られたケースは35%(27名)だった。変化が見られたと回答した人のうち、「やる気が出た」「意識を高く持つようになった」など、意識の変化があったと答えた学生が10名であった。具体的な学習の変化として、単語帳を見るようになった(2名)、友達と英語で会話するようになった(1名)、洋楽を聞くようになった(1名)、スピーキングの授業を履修した(1名)、英語のニュースを毎日聞くようになった(1名)、場面を想像しながら学習するようになった(1名)、授業で声を出すようになった(1名)、わからない単語があったら調べるようになった(1名)、などの回答が見られた。本調査の中でTOEICのスコアの最も高いTOEIC Training Idを履修しているアンケート協力者11名のうち9名が英語ができてよかった、もしくはできたらよかったのと思った経験をした後、英語の学習への変化が見られたと回答しており、具体的な行動



Q4



に移しているのが特徴的である。TOEIC のスコアの高いクラスの学生ほど、英語の必要性を感じた後、具体的な学習へとつなげていることがわかる。

Q7 英語に触れる機会（いつ、どのような状況において）

「いつ」という質問に対する回答数が少なかったため、有効なデータは得られなかった。

英語に触れた機会としては、洋楽を聞いた、洋画を見たが21名と最も多く、続いて、アルバイト関連が18名であった。その他、旅行先等で話しかけられたが10名だった。空欄を含め、「記憶にない」「ない」などと回答した人は38名（約40%）に上った。

Q8・9 身近な人の英語との関わり

英語を必要とする仕事に就いている人が身の回りにいる学生はわずか18%（107名中18名）であった。内訳は親と回答した人が7名、親戚が6名、友人1名、先輩1名、その他3名であった。

Q10・11 英語はこれから重要だからしっかり勉強した方がよいというようなことを言われた経験

回答者の85%（107名中91名）が、言われたことがあると回答した。両親から言われた経験があると回答した人は51名と半数近く、続いて、教師からが36名、親戚からが8名、友人からが8名であった。また、高校時代に言われたと回答した人が最も多く、58名であった。続いて、大学生になってからが39名、中学生のときが31名、小学校のときと回答した人が5名であった。

以上のアンケート調査から見えてきたことは、1つは英語が大切であるという共通認識と多くの学生が日常生活において英語に触れる機会は非常に限られているという現実とのギャップである。もう1つは、英語に触れ、英語ができるようになりたいと思っても、その後の学習の変化につなげている学生はごく少数であるという問題である。次節では、最初に述べた2つの分析課題、すなわち（1）英語に対してどれだけ親近性（機会、好感性、必要性）を見出しているか、（2）現在学生が置かれているEFL環境で、自律学習者を育成するためにはどのような方法があるのかについて、インタビュー調査の結果を踏まえ考察を行う。

4. 考察

4.1 英語に対する親近性

4.1.1 英語を使用する機会

言語を高いレベルで習得するためには、学習言語の使用機会や量を最大限に増やす必要があるということは、これまでの研究で実証的なデータに基づいて提唱されている（竹内、2003、pp. 170-171）。しかしながら、アンケート結果に見られるように本学学生が英語を使用する場面は限定的であり、自発的に英語を使用する機会を作っている人はわずかである。アンケート調査のQ7「英語に最近触れたのはいつ、どのような状況においてか」については、無回答を含め、「記憶にない」「ない」などと回答した人は、38名（約40%）に上っており、また、道や旅

行先で声をかけられたなどと回答した10名（約10%）についても偶然の機会を除いては、英語に触れる機会がないことが想像できる。このような限られた機会の中で、「アルバイト先での接客」、「英語ボランティア」、「留学生との交流」は学生にとって英語の発話の機会や量を増やす重要な機会であると考えられる。中でも、アルバイト先は、アンケート調査において「英語を最近使用した」場面（約26%）、また、「英語が話せてよかった、または話せたらよかった」場面（約25%）に挙げられていることから、多くの学生にとって英語を実践する場であり、英語へのモチベーションを上げるきっかけとなる可能性のある貴重な機会であることがわかる。また、英語ボランティアや留学生との交流は、実践している学生の数は少ないものの、EFL環境における英語の実践の機会として着目すべきである。インタビュー調査では、どのくらいの頻度で英語使用の機会があるのか、どのような経緯でその活動に関わったのか、具体的な会話の内容など詳しく尋ねた。特に、英語の必要性を感じた経験として記載の多かった会話の機会について詳しく聞き取りを行うことで、英語に対する親近性を高めるための方法を探ることが狙いである。

アルバイト先での英語の使用：ここでは英語を使用する頻度が高く、その機会を生かしているFさんの例を紹介する。Fさんは交流文化学部2年生でTOEIC Training Idを履修している。週6日外国人客が頻繁に訪れる寿司屋で1年以上アルバイトをしており、毎回の勤務時に、英語で接客する機会がある。インタビューを行った日の前日のアルバイトでは、5組の外国人客の接客をしたという。注文の取り方や会計についての簡単なマニュアルはあるものの、英語での接客の指導をアルバイト先で受けたことはない。店員の中でFさんは英語が一番「できる」ため、他の人が対応できない場合、代わって対応する。客からの質問は、パネル注文の仕方、メニューについてが多い。質問されて1回目はわからなくても、同じ質問であれば2回目はうまく答えられる。最近では、自ら進んで声をかけ、業務以外の話もするようにしているという。

Fさんの例に見られるように、アルバイト先での英語のやりとりのほとんどはパターン化されたものであり、使用する単語・表現は限られている。その意味で、語彙や表現の幅を広げることにはつながらないかもしれない。しかし、その限られた表現を繰り返し実際の場面で使用する機会を持つことで、英語の自然さが増していくという効果は十分に期待できるものと思われる。竹内（2003）の研究で明らかにされているように、英語学習の初期から中期の段階では、基本文例や表現を徹底的に暗記し、それを自由に使えるように練習するという方略が重要である。この意味でFさんの例に見られるようなアルバイト先での接客は、1つの有効な学習方法であると言える。

英語ボランティア：本調査において、英語ボランティア経験について記述した学生は1人のみであり、まだ英語を使用する機会のあるボランティアに参加している学生は少ない。しかし、本学は学内のコミュニティ・コラボレーション・センター（CCC）を通じて、学生がボランティア等の情報にアクセスできるようになっており、本学の学生が英語使用の機会としてボランティア活動を活用しやすい環境が整っている。ここではCCCを通じて英語ボランティアに参

加した交流文化学部2年のAさんの例を紹介する。Aさんは、何かボランティアをしたいと思い、友人と学内のコミュニティ・コラボレーションセンター（CCC）に行った。CCCの利用は初めてであった。様々なボランティアの情報の中で、「英語を使いながら」というところに惹かれ、子どもに英語で話しながら遊ぶイベントにボランティアとして参加した。英語を使ったボランティアは初めてである。ボランティアとして参加していた外国人と空き時間に話す機会があった。「これからもこのような英語を用いたボランティアに参加したい。」と語った。Aさんが述べているように、ボランティア活動ではアルバイトよりも自由に話す機会がある。また、自らの関心のあるボランティア活動に参加すれば、共通の関心を持った仲間と出会う可能性もある。共通の関心を持った仲間と英語で話す機会を持つことができれば、英語を学習しようというモチベーションは高まることが多い。自らの関心のあるボランティアで、尚且つ英語を使用するものというのは難しいかもしれないが、見つけることができれば、強い学習の動機づけとなるであろう。

留学生との交流：英語ボランティアと同様、留学生との交流を通じて英語発話の機会を増やそうとしている学生は多くないことがアンケート結果から予想されるが、留学生との交流は英語の発話の機会を増やすという意味でも、また、異文化を学ぶという意味でも貴重な機会である。留学生と交流するサークルに所属している交流文化学部1年生のEさんによると、4月から10月までに参加したサークルが主催する留学生との交流イベントでは、アメリカ人、インドネシア人、中国人、韓国人などさまざまな国からの留学生と触れ合う機会があったという。英語を話す留学生ばかりではないが、英語だけが特別な外国語であるかのようなイメージを持たず、多言語の中の1言語という意識を持つことは大事であり、さまざまな国の留学生との交流はそういった意識を育てるのに役立つと思われる。また、英語を母語としない留学生と英語でコミュニケーションをとることは「英語＝母語話者のもの」という認識が正しくないことを理解する機会となると考えられる。

4.1.2 必要性

英語を話せてよかった、または話せたらよかったのと思った経験がある人、すなわち英語の必要性を感じた経験がある人は全体の75%に上る。しかし、その一方で、その後、英語の学習に何らかの変化が見られた人は35%に留まっているということにも着目する必要がある。具体的な変化が見られなかったということは、実際には、それほど必要であると感じていなかったという可能性も大いに考えられるからである。また、英語の使用機会が少ないためという頻度の問題や英語に対する劣等感（これについては4.1.3で詳しく述べる）などが原因で学習への意欲がわからないなどの好感性に関わる問題も関係している可能性がある。

インタビュー協力者の中で、自発的に英語学習を行なっている人は、何らかの形で英語の必要性を強く認識していた。例えば、ビジネス学部1年生のCさんの場合、親戚と父親が英語を仕事上必要としており、父親や親戚が毎日英語を勉強しているのを日常的に見ている。また、父親の勤務先ではTOEICを受験するよう社員に通達が出ていることなど、具体的な情報を得

ている。また、Cさん自身、アルバイト先で頻繁に英語を使用する機会があり、それも英語の必要性を実感する機会になっていると考えられる。インタビューの際、「英語は必要だとは本当に思う。」と繰り返し述べている。

ビジネス学部4年生のGさんの場合は、幼い頃より父親から英語の必要性を言われて育ったが、いくら言われても必要だという実感はわかかなかったという。大学に入り、留学生を対象にしたイベントの企画に関わった際に、英語の必要性を感じ、高校で使った単語帳の見直し、本学のe-learning教材を用いたリスニング学習、洋楽を日本語と英語のスキリプトを見ながら聞くなどの学習を行った。その後、さらに英語学習に変化が見られたのは、英語が必要な会社に就職が内定した後である。英語科目を2科目履修し、教員にアドバイスを求めながら、TOEICの勉強、語彙の強化を積極的に行なっている。留学生を対象としたイベントではリスニング力・単語力が必要と考え、単語の見直し、リスニングの強化を行い、就職先ではビジネス英語が必要と考え、TOEICの勉強をする、という必要性に応じた学習パターンが見られる。

アンケート調査で85%の人が英語は今後重要であると周りの人に言われた経験があると答えているが、周りの人からのアドバイスは必ずしも効果があるとは言えないようである。やはり、自らが英語を学ぶ必要性を実感できる機会に出会えるかどうかが重要であると言える。

4.1.3 好感性

アンケート調査の回答とインタビュー協力者の発言の中で、英語に関して何らかの感情を表す語を抽出すると、いくつかの傾向が見られる。

まずは英語が話せる人に対する「憧れ」である。アンケート調査の回答の中には、「海外の人と流暢に会話できる人を見て憧れる」「スラスラと答えられている先輩がすごくかっこよかった」「ディズニーランドのお姉さんが外人と話しているのを見てかっこいいと思った」などの記述が見られる。これらの記述からは回答者が「英語はクールだ」で「英語はおしゃれだ」といった情意的価値観を抱えていることがわかる。こういった英語に対する「クール」で「おしゃれ」なイメージは、企業やブランド戦略に利用されることで生産・再生産され、日常生活で活用されることでますます日本社会に広く浸透していく傾向にあると柴田(2014)は指摘している(p. 39)。こういった傾向は、英語を学ぶ動機づけになりうるという点で肯定的に捉えることができる。調査の中でも、英語を流暢に話している人を見て、学習に変化が現れたケースも複数見られる。

しかし、一方で、英語のこういったイメージは、英語ができないことを一種のコンプレックスであるかのような気持ちにさせ、劣等感を生み出す面もあることがインタビュー調査から浮き彫りになった。例えば、Cさんは「英語は好きだから話せるようになりたい」と語っているように、英語に対して好意的な印象を持っており、英語に対する憧れが強い。しかし、同時に自分よりも英語ができると感じる人に対して劣等感を抱いている。このことは筆者が、本学が実施している「Lunchtime Conversation」の利用について質問したときに顕著に表れた。Cさんはこのことについて知っていたが、参加するのは「無理」だと言う。「緊張して、他の人が喋っ

ていたら、すごいついて思って無理だと思う。」とCさんは述べている。また、他大学に通う留学予定の友人の希望により、英語で会話することがあるが、「正直キツイ」と感じている。その友人は英語ができるから難しいとも言えるが、自分はそれができない。できないと自己嫌悪になるという。英語で言いたいことが言えなかったときの自己嫌悪感はアルバイト先でのやりとりがうまくできなかったときもCさんは感じている。

交流文化学部1年生のDさんは、英語ができなければならないという感覚を強く持っており、その意識が英語ができないことへの劣等感、そして英語に対する嫌悪感につながっているように思われる。Dさんの英語ができなければならないという意識は、母親や姉の影響が大きいものと考えられる。Dさんには2歳年上の姉がおり、他大学の英文科に進み、キャビンアテンダントを目指している。Cさんは姉が英語ができることを「羨ましい」と感じている。また、母親も英語が好きで得意である。英語の課題について聞くと「そんなものわからないの」と言われる。英語ができる姉や母親と自らを比較し、英語への苦手意識が増していった可能性がある。Dさんの英語への苦手意識は幼稚園から小学3年生まで通っていた英会話スクールに遡る。自己紹介のときに、英語ができる子が周りにいて、自分がスラスラ話せないのが嫌だったという。

Dさんの英語に対するコンプレックスは特にスピーキングにおいて顕著に現れるようである。例えば、Dさんはアルバイト先で外国人に道を聞かれることが度々あるが、うまく答えられないと「交流文化学部にも所属しているのに」と自己嫌悪を感じる。一方で、履修しているリーディングとリスニングの授業における英語学習は比較的楽しいと感じている。

Dさんの希望する職業の1つは英語が必須であるが、あきらめて英語の必要のない職業選択をしようと考えている。Dさんの場合、英語の使用機会、英語の必要性というよりは、英語への苦手意識や英語ができないことへの自己嫌悪感が自発的な学習を阻害する要因になっていることが考えられる。

しかし、英語に対する苦手意識や劣等感はTOEICのスコアが低いから感じる、というわけではないようである。例えば、同じく交流文化学部1年生のEさんのTOEICのスコアはDさんよりも低い、Eさんとの対話の中では英語ができないことへの自己嫌悪感を示す言葉は一度も出てこなかった。むしろ、「英語は長くやっているから、だいたいわかるし、伝えることができる」と自らの英語使用能力に対して肯定的である。この違いはどこから来るのか。家庭環境の違い、必要だと感じているレベルと現在の自分のレベルとのギャップ、個人の性格など、様々な要素が想像できるが、今後その要因を分析していく必要があるであろう。

4.2 親近性を高めるための方法

以上の分析からわかるように、(1)英語使用の機会があること、(2)英語の必要性を実感していること、(3)英語に対して肯定的な感情を抱いていること、の3点が自律的な英語学習者になるための重要な要素になっている。(3)の英語に対する好感性については、マイナスの感情がある

からといって、必ずしも自律学習につながらないというわけではないであろう。自らがうまく話せなかったことからくる自己嫌悪感などは、人によっては強い動機付けになることもある。好感性については、英語ができないことに対する劣等感に対して、いかに配慮していくかが重要であるように思う。このことを踏まえ、英語科目を担当する大学教員にできるであろうことを以下に述べる。

(1)学生が英語に接触する機会を増やすための方法：EFL 環境では、学習者が意図的に英語に接触する機会を増やさない限り、学習の成功のために十分な学習機会を得ることができないと言われており（青柳・小西・久保田他、2008、p. 82）、教員が英語に接触する機会を増やす手助けをすることは非常に重要である。その方法の1つは情報提供ではないかと考える。今回の調査協力者の中で、自発的に英語使用の機会を作っている人はごくわずかであった。英語に触れていない理由として、他のことで忙しく時間がない学生もいるであろう。しかし、どこにアクセスをして、何をすればよいかわからないことから英語使用の機会を持たない学生も多いのではないだろうか。交流文化学部2年生のFさんは、教員が授業の中で提供した情報を利用し、英語のニュースを毎日聞き、アメリカのコメディを見て、英語を学ぶなど自律学習に積極的に取り組んでいる。「いろんな教材を紹介してくれる先生はありがたい」という。また、学生がどのような自律学習を行っているかを授業の中で共有する機会を作るのも効果があるのではないかと考える。

(2)英語の必要性を実感させるための方法：アンケート調査の結果を見ると、外国人との会話をきっかけに英語の必要性を感じている人が多いことがわかる。この事実から見ても、英語の必要性を実感させるためには英会話の機会を増やすことが不可欠である。また、学生にとって身近な存在である上級生や卒業生に、就職活動中のあるいは仕事先での英語に関する体験談を話してもらい、などの試みも英語の必要性を実感してもらい方法の1つであると考えられる。

さらに、英語を自分の問題として捉えさせるために、学生の経験を授業の教材に用いる方法もあるのではないかと考える。例えば、学生に英語ができればよかったと思う経験を書いてもらい、授業の中でどう答えればよかったかなどをグループごとに調べさせる。会話をそれぞれのグループで作成して、ロールプレイをする。学生の経験と直接結びつく内容を授業で取り上げることによって、英語に対する親近性が高まるのではないかと考える。そして、アルバイト中に授業で学習したことが発揮できれば、英語をうまく話せないことによる自己嫌悪の感情を克服し、英語学習への意欲が高まることも期待できる。

(3)好感性を高める方法：好感性の問題については、自己嫌悪感や劣等感をどう克服する方向に持っていか、また、自分より「できる」人と学習するときを感じる劣等感にいかに配慮するかが重要であると考えられる。(2)で挙げた授業例は自己嫌悪感を克服する1つの方法であると考えられる。また、自分より「できる」人と学習するときを感じる劣等感に考慮した指導法となると、やはりマンツーマンの会話レッスンの機会を作るとするのが最善であると考えられる。大学内で昼休みの30分でもマンツーマンで会話する機会があれば、英語をできるようになりたいが、自分よりもできる人と一緒にいると話ができないと感じている人も積極的に利用するようになるの

ではないだろうか。

5. まとめ

本研究は、より学生の現実に即した英語指導を行い、EFL 環境の中で自律学習者を育てることを最終的な目的とするものである。今回の調査から、英語に接触する機会が非常に限られている学生が多い中で、いかに英語への接触の機会を増やす手助けをしていくか、そして、学生が英語の必要性を実感できる授業をどのように作っていくかが重要であると言える。今後は、今回のアンケート調査で有効なデータを得られなかった質問等を修正し、調査を継続する。また、今回提案した方法を実践し、その方法が有効かどうか検証していく。

参考文献

- 青柳龍也・小西正恵・久保田絢・榊原かをり (2008) 「コーチングの考え方に基づく英語自律学習支援」『津田塾大学紀要』(40) : 79-101.
- 小林 文・齋藤 勲・沼澤 聡他 (2013. 12) 「薬学部2～4年生の海外留学と英語に関する意識調査」『昭和大学薬学雑誌』4(2) : 179-188.
- 柴田亜矢子 (2014) 「ブランドとしての英語：その情意的イメージと社会への影響」『Media, English and Communication』4 : 23-41.
- スミス山下朋子 (2012) 「薬学系大学生の英語学習に対する意識：学部生を対象とするアンケート調査から」『大阪薬科大学紀要』6 : 41-47.
- 竹内理 (2003) 『より良い外国語学習法を求めて—外国語学習成功者の研究』東京：松柏社.
- 和田信明・中田豊一 (2010) 『途上国の人々との話し方—国際協力メタファシリテーションの手法』みずのわ出版.